

環日本海の自然 リャンコ大王

「リャンコ大王」というニックネームを持つこの印象的な生物は、現在は絶滅したと考えられるニホンアシカ（オス・成獣）の世界で唯一のはく製である。このアシカは 1931 年に朝鮮半島と日本列島の間地点にあるリアンクール岩礁で捕獲された。「リャンコ」は 1859 年にそこで難破しかけたフランスの捕鯨船、ル・リアンクールにちなんでこの島に名付けられた「リアンクール」が短くなったものである。「アシカ網を食いちぎったり、船を襲ったり」し、「鉄砲の玉にもひるむことのなかった」、威嚇的で時に危険な島の暴れん坊であるこのアシカに、地元の漁師はリャンコ大王と名付けた。このアシカは殺された当時、推定 750 キログラムであった。

一時、日本海全域に多数のニホンアシカが生息していた頃は、島根沿岸、隠岐諸島、リアンクール岩礁でよく目撃されていた。しかし彼らは 20 世紀の最初の 10 年間に商業的な大規模捕獲のターゲットとなってしまう、リアンクール岩礁だけでも多い時には年に 3,200 頭もが殺された。これらの小さな島は最後に残ったニホンアシカの繁殖地であったことがわかっており、最後に目撃されたのは 1953 年であると記録されている。1974 年に北海道北部で若いニホンアシカが捕獲されたが、これ以降の目撃例はない。ニホンアシカは日本の絶滅危惧種のレッドリストに公式に記載されたままだが、実際にはすでに絶滅したと考えられる。

かつてはカリフォルニアアシカの亜種と考えられたが、2007 年にニホンアシカは別種として再分類された。オスは平均的な体長 2.4 メートル、体重 490 キロで、カリフォルニアアシカよりも大きい。リャンコ大王の突き出した額は矢状稜と呼ばれ、これはオスが成熟するにつれて、頭頂部が厚く突き出てくる現象によってできるものである。